

は、回復のために、女性の性器を水で洗い、その水に糞を混ぜて与えたそうです。

1840年に、医師であり宣教師でもあったダニエル神父が、この豆を研究のためロンドンへ持ち帰りました。1864年に、この豆からインドールアルカロイドのフィゾスチグミン（現地のエゼレにちなんでエゼリンとも言われます）が発見されました。その後、1875年には緑内障の治療に使用され始め、1900年代に入ると、重症筋無力症の治療に用いられ成果をあげました。ちなみに、ノーベル賞を受賞したアセチルコリンと関連酵素の発見は、のちの1936年のことです。

現在では、フィゾスチグミンはその副作用のために使用されていませんが、1932年に合成ネオスチグミンという非常に構造の似たものが合成されて、副作用も少なく血液-脳関門も通過しない、低価格の薬になりました。これらは、現在、重症筋無力症、術後の膀胱や腸の麻痺、緑内障、クラレなどの解毒薬に使用されています。コリンエステラーゼ阻害薬は、アルツハイマーの治療にも使用されています。

面白いことに、大陸移動説をみると、大昔はこのカラバル豆とその拮抗薬であるクラレは、ほぼ同じ地域に並んで存在していたことになります。それが大陸の移動で分断されてしまったようです。

この豆には、フィゾスチグミンのほか、カラバリン、ノルフィゾスチグミン、エゼラミン、フィゾベニン、ジェネゼリンなどが含まれています。この中でカラバリンは、ストリキニーネと似た作用があり、大脳髄質に働き、強縮性の作用を示します。

AFFINITY

Physostigma venenosumは、主に眼疾患に使用し、とくに平滑筋や神経系の症状を併発している場合に有用なレメディです。

CLINICAL APPLICATIONS

■眼疾患

- ・眼精疲労，調節性眼精疲労：視覚がぼやけたり，目の前に黒い点状のものが舞っているように見えることがあります。
- ・近視，乱視，老視
- ・緑内障：とくに外傷後の続発性緑内障。瞳孔が収縮しています。
- ・光線過敏症
- ・眼瞼の不全麻痺：とくに带状疱疹によります。
- ・眼球周囲の付帯する筋肉の麻痺
- ・斜視：とくに子供の外科手術後
- ・各種眼疾患に，尿路感染症や平滑筋の痙攣，筋肉の緊張，頭痛，脊髄炎，手足のしびれなどを併発している場合があります。

■その他

- ・尿路感染症
- ・運動失調
- ・パーキンソン病
- ・不眠症
- ・頭痛：眼球周辺部が痛み，瞼を持ち上げることができません。夜に悪化します。頭頂部の痛みが持続します。

■特異的な感覚

満腹になったような感覚，正気を失いそうになる感覚，ボールが喉を昇ってくるような感覚，背中が麻痺したような感覚，舌が火傷して，腫れ，麻痺したような感覚，舌先が痛い感覚，収縮したり緊張するような感覚，脳が揺れ動くような感覚，胃が弱まっている感覚などがあります。

MODALITY

- 涼しい外気，睡眠，目を閉じること，足を温めること，右下に寝ること，頭を低くしてうつ伏せに寝ることなど
- ◀ 目の酷使，入浴，患部の圧迫，動くこと，階段を下りること

Phytolacca decandra アメリカヤマゴボウ [乳腺炎，焼けるように熱い喉の炎症]

Phytolacca decandra L.

Phytolacca amaricana L., Phytolacca vulgaris Crantz

BACK GROUND

Phytolacca decandraは、北米原産のヤマゴボウ科

ヤマゴボウ属の小低木で、湿った地に生育しています。高さは、1～3mくらいに成長します。6月から9月に



かけて白い小さな花が咲き、秋に実がなります。実は房状で、熟すと赤黒色になり、つぶすと濃い赤紫色の果汁が出ます。この果汁は、昔はインクの代用品として使われていたことがありました。



(A)

葉は長楕円形をしていて無毛で軟らかく、大きさは20～30cmくらいです。秋になると茎も葉も紅葉します。若葉、果実が食用になりますが、草全体に有毒成分を含みます。

学名のPhytolaccaは、ギリシア語のphyton植物、ラテン語のlacca赤い色素という意味があり、果実の汁の色に由来しています。種小名のdecandraは、この植物の花の10本の雄しべに由来します。

一般名は、Virginian pokeroor, Reading plant, Garget, Red ink plant, Pgeon berry, American nightshade, Pocanなどと呼ばれています。日本では、アメリカヤマゴボウ、ヨウシュヤマゴボウなどと呼ばれています。なお、食用の山牛蒡はモリアザミの根で、本種とは関係ありません。日本には明治初めに貴重な薬草として渡来しましたが、現在では荒地や空き地、道端にも見ることができます。

ヨーロッパでは、この植物は、乳腺炎や小さくて固い乳腺腫瘍の治療に使われてきました。アメリカ先住民は、これをリウマチから痔にいたるまで、さまざまな疾患に対する薬草として用いてきました。今日においても、アパラチア山脈奥地に住む人々の間では、この植物の種子や果実を、関節炎の薬として噛む習慣がありますが、毒性があります。全草が有毒で、とくに根を多量摂取すると激しい嘔吐と下痢を引き起こします。

近年では、この植物は、リンパ浄化のための薬草として、扁桃炎や乳腺炎、急性リンパ節炎、関節リウマチなどに利用されています。また、外用薬としても、皮膚の真菌感染症、乾癬、疥癬、皮膚潰瘍、湿疹、関節炎、痔などに用いられています。James Tyler

Kentは、Phytolaccaを「植物の水銀」と呼んでいました。

MATERIAL

冬に引き抜いた根と、実を含む植物全体

マザーテックチャーに含まれる主な有効成分は、次のようなものがあります。

- ・ボークウィードマイトジェン (PWM) : in vitroでリンパ芽球性変換を誘発する作用が認められており、免疫作用で活躍するT細胞とB細胞への刺激作用があります。
- ・ヘマグルチニン：血球凝集素として働きます。
- ・ヒスタミン
- ・各種サポニン配糖体：代表的なものにはフィトラッコサイドがあります。抗リウマチ作用や抗炎症作用などが知られています。
- ・フィトラック酸
- ・タンニン酸
- ・ジャリゴン酸

このほか、各種ミネラル、ビタミンなどが豊富に含まれています。

FIRST PROVING

『Transactions of the American Institute of Homoeopathy』第2巻

AFFINITY

Phytolaccaは、主に腺に関する疾患、とくに乳腺に親和性をもっています。ほかにも、筋線維組織（とくに頸部、背部、関節周囲）、骨膜、腎臓、舌、消化器系、鼻咽頭、喉、扁桃腺などに親和性があります。

CLINICAL APPLICATIONS

■乳腺

- ・乳腺炎（とくに左側の乳腺）
- ・**乳腺腫瘍、乳腺癌**
- ・乳房痛：月経前症候群によります。月経困難症を伴います。
- ・硬化性乳腺症
- ・乳首のひび割れ
- ・授乳中にしこりができて固くて痛い：痛みは乳首から全身に広がります。

■頭部

- ・菌を食いしばると楽になる歯の痛み
- ・舌炎、舌の先端が赤く、舌苔が多い。
- ・扁桃腺、咽頭、舌根部が痛み、暗赤色に変色する炎症性病変（とくに右側）



(A)

- ・喉の痛み：冷たい飲物で改善，熱い飲物を飲み込むことができません。喉が熱く痛み，痛みが舌根部から耳にかけて走ります。
- ・首のリンパ腺腫脹
- ・耳下腺炎，おたふく風邪
- ・結膜炎，眼瞼麦粒腫，霰粒腫
- 肢
- ・腱の痛み，腱鞘炎，滑液包炎
- ・リウマチ：暖めると悪化します。朝や夜，湿気で悪化，痛みが電気ショックのように走ります。
- ・坐骨神経痛，神経痛
- ・脛骨の痛み（夜に悪化）
- ・踵や足首の痛み

- ・足底筋膜炎
- ・リウマチで Bryonia や Rhus toxicodendron が効果のないとき

■皮膚（とくに皮膚病の初期段階で有効）

- ・乾癬：紫がかかった色の病変があったり，同時に骨の痛みを伴うとき
- ・炎症性の腫れ物がでしやすい体質
- ・性病性リンパ肉芽腫
- ・痛みのある硬結性の癬痕

■その他

- ・熱性疾患：動くときと節々の痛みが悪化します。
- ・腫瘍：主に乳腺，ほかに鼻，下唇，舌，唾液腺，直腸，陰茎，子宮など。

また，このレメディは，ジフテリアに非常に効果があると言われています。

MODALITY

- ▶ 冷たい飲物，休息，腹ばいに寝ること，暖めること，乾燥した気候など
- ◀ 動きはじめ，夜，過度の運動，触られること，生理中，熱い飲物を飲むこと，寒さ，湿った気候，雨など

RELATIONS

- ・ Antidotes：牛乳，塩，Belladonna，Mezereum
- ・ Complementary：Lueticum，Micrococcinum，Silica
- ・ Incompatible：Mercury

Picricum acidum ピクリン酸 $C_6H_3O_7N_3$ [精神力の欠如]

Picric acid- $C_6H_3O_7N_3$

BACK GROUND

Picric acid は，淡黄色の光沢のある小葉状あるいは針状結晶で，無臭です。発火点が低く，衝撃に敏感なので，急熱あるいは衝撃により容易に爆発します。トリニトロフェノールが正式な名称です。水，有機溶媒に溶け，フェノールの一種ですが，強い酸性和苦味をもつのでピクリン酸という名があります（picro = 苦み）。このピクリン酸はもともとドイツ人スプレングルが，黄色の染料としてつくったもので，偶然その爆破力を発見しました。この試薬の製造法は，フェノー

ルを直接ニトロ化しても得られず，いったん濃硫酸やクロロスルホン酸などでスルホン化したのち，ニトロ化してつくります。

以前は爆薬の材料として使われたこともありますが，腐食性があるために現在は用いられていません。また以前は，外用薬として，その鎮痛作用と角質溶解作用から凍瘡や湿疹に使用されていたことがありました。今は試薬，染料などに使用されています。

毒性が強く，皮膚に吸着すると黄色の変色を生じ，薬火傷を起こします。また皮膚からも吸収され，頭痛，